

(別紙2)

## 審査の結果の要旨

氏名 上原 究一

『西遊記』の物語が今日見られる首尾整った形でできあがった、いわゆる「百回本」の成立とその後の展開を論ずる。「百回本」には、世徳堂本系、李卓吾批評本系、清代に入ってから各種版本など、多様な版本がある。上原氏は、この前二者については、日本国内はもとより、中国、台湾等の地に散在する各版本のほぼすべてを実地に調査し、複雑に対立する諸家の見解を的確に整理した上で、これら意見の分かれる問題を、各版本間の微細な差異に至るまで精査することによって、決着をつけた。

第一章。『西遊記』第九十九回に、三蔵一行の受難のリスト、「聖僧歴難簿」があるが、世徳堂本においては、受難の順序が実際の物語の順序と食い違っていた。この矛盾を解決したのが、従来世徳堂本と大差ないとされていた李卓吾批評本であることを示し、この本の『西遊記』版本史上の位置を確定させた。

第二章。現存する世徳堂本四種の系統および先後につき、台湾故宮博物院蔵本、日光輪王寺慈眼堂天海蔵蔵本、天理大学図書館蔵本の順に三本が印刷され、これらが建陽の宏遠堂熊雲瀆による覆刻本であることを示すとともに、従来はその覆刻本とされることもあった広島浅野文庫蔵本の方が、少なからぬ補刻葉を含みつつも、より初刻本に近い特徴を持つことを明らかにした。

第三章。世徳堂本の陳元之序に見える「唐光祿」について、これが世徳堂の初代主人と思しき唐廷仁であること、さらに唐廷仁の後を承けて万暦二十年代末から天啓年間にかけて兄弟で世徳堂主人として活動していた唐晟と唐景のうち、兄の唐晟も「光祿」を称していたことを明らかにした。

第四章。李卓吾評本の版本問題を論じ、従来甲本・乙本・丙本のうち最も劣るとされてきた丙本こそが、かえって李卓吾評本の初刻本の版本による通修本であることを証明した。

第五章。『西遊記』成立史上重要な書肆、周氏万卷楼及び周氏大業堂について、彼らが刊行した『西遊記』以外の書物も渉猟し、周庭槐、周如山、周亮工ら代々の出版活動を具体的に検証した。

第六章。清代の百回本『西遊記』諸系統の版本問題を論じ、最も流行した陳士斌詮解本系では、十行二十二字A本が現在知られる中で最も初刻本に近いことを指摘した。

第七章。世徳堂本『西遊記』は建陽で覆刻される。従来は単に海賊版として片付けられて来たが、覆刻が、双方の了解の上で行われていたと見るべき事例が、金陵の唐氏・周氏の書坊と建陽の余氏の書坊の間に多々認められることを指摘し、通説に一石を投じた。

個々の文献の解釈及び推論の過程につき、いくつかの指摘があったが、『西遊記』刊行の背景にある書店の動向など出版界全体を視野に入れながら、『西遊記』百回本に関し、従来解決をみなかった多くの問題に定論といえる見解を提出した功績は大であり、本論文が博士（文学）の学位を授与するに値するとの結論に至った。